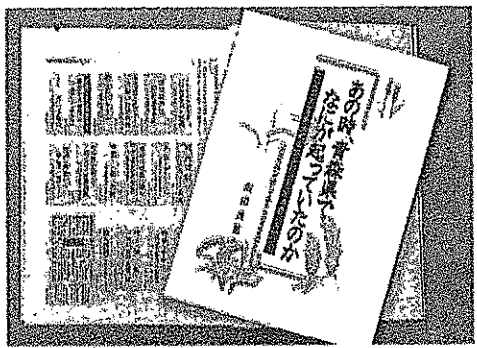


7/20 読

「隣組」でがんじがらめ

戦後70年の節目の今年、安倍政権が「海外で戦争する国づくり」に暴走するなか、「庶民にとっての戦争とは、何だったのか」を考えます。

図書館に通いつめ、青森 12年6月)という本にま
県の地方紙「東奥日報」の1
930年以降の記事に目を
通し、庶民と戦争との関わ
りを『あの時、青森県でな
にが起っていたのか』(20
かびあがってきます。



「東奥日報」記事から戦争中の
庶民の生活を見た『あの時、青
森県でなにが起っていたのか』

第5部

第2次世界大戦 終結70年

庶民にとっての戦争

-1-

連帯責任で統制

「戦争中、あらゆるもの
が戦争と結び付けられてい
きました。その一つが『隣



飯田美苗さん

組』です」と話す飯田さん。

隣組は「隣保団結ノ精神
ニ基キ…地方共同ノ任務ヲ
遂行セシムル為」として1
940年に制度化。隣近所
で防空・防火・防ちよう、
食糧や生活物資の配給、住
民動員や物資供出の連帯責
任を負わせ、住民同士を監
視させる役割を果たしまし
た。

飯田さんは「隣組単位で

配給が行われていたため、
防火訓練に参加しなかった
り、空襲で火が上がっても
消火せずに逃げたりすれ
ば、食糧ももらえなくなる。
庶民は相互監視でがんじが
らめに戦争体制に組み込ま
れていたわけです」と話し
ます。

『あの時』によると、
隣組の記事が載り始めるの
は制度化された4年ごろか
ら。「超非常時だ、明日を
計られない世界情勢だ…防
火用の井戸掘り作業を開
始」「弘前の魚配給、各隣
組で共同購入」「川原の廃
地開墾…弘前浜町隣組共同
耕作」など隣組に関する記
事が紙上に躍りました。

隣組単位で防空訓練が行
われる一方、物資統制によ

り日用品の配給制が進
められていったのです。
資源調達の間でも統制を
強め、無謀な戦争に突き進
んでいった様子がみてとれ
ます。

供出で並木喪失

『あの時』でも、木造船
増産が呼び掛けられ、「お寺
の老杉」「鎮守の杜(もり)も
屋敷の木」も「並木の松」も
「墓地の杉立木」も献木運動
にまき込まれていったこと
を紹介。「本県は二万七千
本を突破」と青森県の成果
を誇る記事もありました。

隣組の記事が載り始めるの
は制度化された4年ごろか
ら。「超非常時だ、明日を
計られない世界情勢だ…防
火用の井戸掘り作業を開
始」「弘前の魚配給、各隣
組で共同購入」「川原の廃
地開墾…弘前浜町隣組共同
耕作」など隣組に関する記
事が紙上に躍りました。

に移り住み、県庁などで働
きました。飯田さんが、戦
前、社会全体がどのように
戦争体制にくみ込まれてい
ったのか、その中で青森県
に生きた女性たちがどう暮
らしていたのか聞き書きを
行うようになったのは97年
に改定された「日米軍事協
力の指針」がきっかけでし
た。アメリカがアジア・太
平洋地域で軍事介入をおこ
せば、「周辺事態」を名目
に、日本が自動的に参戦す
る仕組みがつけられたこと
に、「じっとしていること
ができなかった」のです。
今また、安倍政権が戦争
法案成立へ暴走を続けるな
か、飯田さんは「あの時代と
異なり、圧倒的な国民が安
倍内閣と同調勢力のもくろ
みの危険に気づき廃案のた
めに力を尽くしています」と
と希望を感じています。

(釘丸晶)

(つづく)